

ぼくが6つのとき、よんだ本にすばらしい絵があった。『ぜんぶほんとのほなし』という名まえの、しぜんのままの森について書かれた本で、そこに、ボアという大きなヘビがケモノをまるのみしようにするところがえがかれていたんだ。だいたいこういう絵だった。

「ボアというヘビは、えものをかまずにまるのみします。そのあとはじつとおやすみして、6か月かけて、おなかのなかでとかします。」と本には書かれていた。

そこでぼくは、ジャングルではこんなこともおこるんじゃないか、とわくわくして、いろいろかんがえてみた。それから色えんぴつで、じぶんなりの絵をはじめてかいてやった。さくひんばんごう1。それはこんなかんじ。



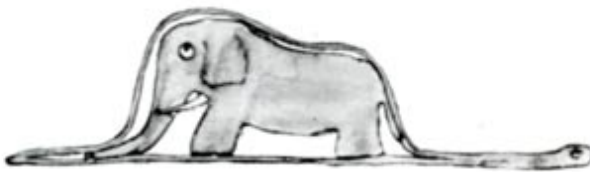


ぼくはこのけっさくをおとなのひとに見せて、こわいでしょ、ときいてまわった。

でもみんな、「どうして、ぼうしがかわいいの？」っていうんだ。

この絵は、ぼうしなんかじゃなかった。ボアがゾウをおなかのなかでとかしている絵だった。だから、ぼくはボアのなかみをかいて、おとなのひとにもうまくわかるようにした。あのひとたちは、いつもはっきりしてないとだめなんだ。さくひんばんごう2はこんなかんじ。

おとなのひとは、ボアの絵なんてながが見えても見えなくてもどうでもいい、とにかく、ちりやれきし、さんすうやくごのべんきょうをしなさいと、ぼくにいいつけた。というわけで、ぼくは6さいで絵かきになるゆめをあきらめた。さくひんばんごう1と2がだめだったから、めげてしまったんだ。おとなのひとはじぶんではまったくなに



もわからないから、子どもはくたびれてしまう。いつもいつもはつきりさせなきやいけなくて。

それでぼくはしぶしぶべつのしごとにきめて、ひこうきのそうじゅうをおぼえた。せかいじゅうをちよつとどびまわった。ちりをべんきようして、ほんとやくに立った。ひとめで中国なのかアリゾナなのかわかるから、夜なかにとんでまよっても、かなりたすかるつてもんだ。

こうしてぼくは生きてきて、ちゃんとしたひとたちともおおぜいであつてきた。おとなのひとのなかでくらししてきた。ちかくでも見られた。でもそれでなにかいいことがわかったわけでもなかった。

すこししかしこそうなひとを見つけると、ぼくはいつも、とっておきのさくひんばんごう1を見せてみることにしていた。ほんとうのことがわかるひとなのか知れたかったから。でもかえってくるのは、きまつて「ぼうしだね。」って。そういうひとには、ボアのこと、しぜんの森のこと、星のこともしゃべらない。むこうに合わせて、トランプやゴルフ、せいじやネクタイのことをしゃべる。するとおとなのひとは、ものごとがはつきりわかっているひととおちかづきになれて、とてもうれしそうだった。

それまで、ぼくはずっとひとりぼっちだった。だれともうちとけられないまま、6年まえ、ちよつとおかしくなつて、サハラさばくに下りた。ぼくのエンジンのなかで、なにかがこわれていた。ぼくには、みてくれるひともおきやくさんもいなかったから、なおすのはむずかしいけど、ぜんぶひとりでなんとかやってみることにした。それでぼくのいちがきまってしまう。のみ水は、たった7日ぶんしかなかった。

1日めの夜、ぼくはすなの上でねむった。ひ

